

郷土室だより

第 10 号

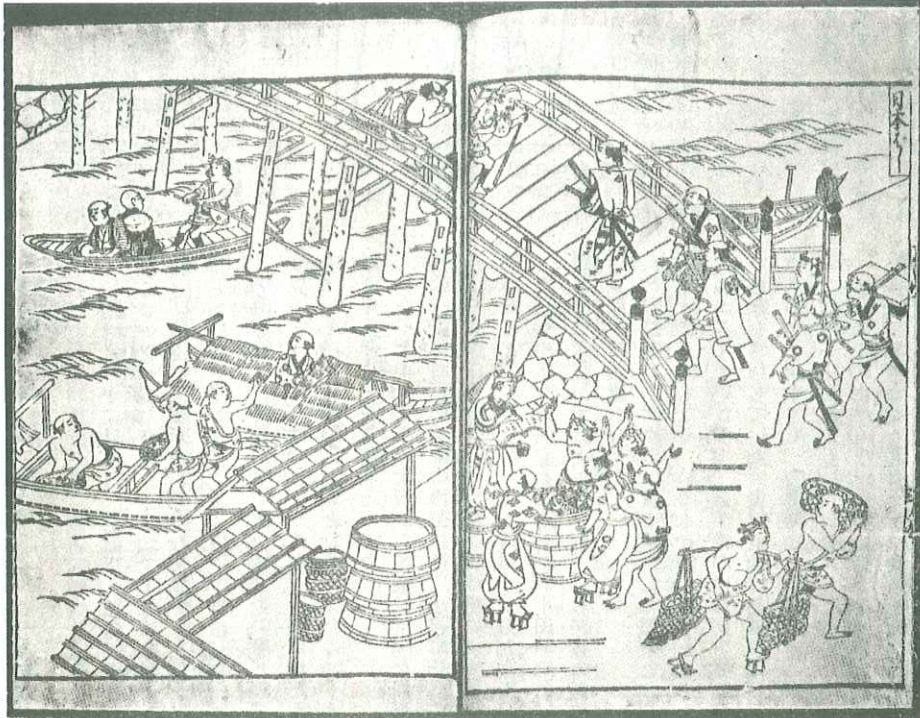
昭和50年9月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 543-9025



日本ばし 八江戸雀

(延宝年中刊)

中央区名物所句集 二

安藤菊二輯

(石町の時鐘)

「寒さうに葉の下を吹き立て 邦 (史邦)

石町鳴れば無縁寺の鐘 蕉 (芭蕉)

手細工に雑箸太きかなくづ水 (雷水)

石町の鐘枕を時てゝ (芭蕉庵小文庫)

冬籠はつかに石路の花を見る 大江丸

「懐で襦半引ぬくあたゝかさ

石町からの鐘かすむ也 拙交 (采若葉)

たま待や石町の鐘のひびきさへ白雄 (句集)

御府内で最初に設置された時鐘、石町の「時の鐘」は、本石町三丁目新道、現今の神戸銀行の南側の横丁にあった。切絵図を見れば、およその見当はつくであろう。鐘撞役は辻源七の世襲で、江戸の下町四百十町ほどの町家から、月々、永楽銭一文(びた銭では四文)の鐘撞料を徴収していた。僅かな金額でも、積れば大きく、源七の家には、いつも七・八人の若い衆が遊んでいたそうである。

ただ、残念なことに、石町の鐘楼の形は絵図面の存するものがなくてよくわからない。元禄三年(一

六九〇)版の『江戸大絵図』に、珍らしくも小さな鐘樓の図が書きこんであるのだが、江戸絵図は、もともと大名屋敷や旗本屋敷の所在地、町名などを知る便宜のために作られたものであるから、たまたま地図に記された符号めく鐘樓の形が見当たったからといって、これを取上げて、旧時の鐘樓の形を推察しようとするのは、早計のそしりを免れないであろう。参考までに、元禄三年(一六九〇)版『江戸大絵図』に書かれた符号めいた「時の鐘」を郭大臨写してここに掲げた。



刻された「時の鐘」(大絵図)の江戸版三年元禄
石町の「時の鐘」(大絵図)の江戸版三年元禄

鐘樓の近傍に卜居していた夜半亭巴人と、画人と謝蕪村とのことも書きたいが、長くなるので、これはまたの機会に譲ろう。

(本船町)

五月雨や本船町のあらひ桶

素丸 (発句集)

本船町は、日本橋と江戸橋間の北岸を総称し、俗に称して魚河岸といった。本船町は小舟町(こぶなちよう)に対する名で昔の呼称は大船町であった。町域も二丁目・三丁目に分れていたが、明治に入

て一町となった。河岸地には、もと、船具や麻などを商う店舗が多くあったそうである(『新撰東京名所図会』)。

(小田原町)

かほる也小田原町のみなみ風

億丸 (誹諧当世男)

小田原町は、慶長年間、江戸城拡張の際、築城経験豊かな石工善右衛門という人を、小田原城下から呼びよせ、この地を石置場として与えたので、小田原河岸と呼び、後に町名となった。

一方、天正十八年に大坂から関東に下った佃村の漁師、森孫右衛門支配の漁師達は、小網町辺に住居して、御膳白魚上納と、將軍遊覧の際の網曳御用を勤めることになったが、孫右衛門の二男九左衛門は上納残りの魚を販売するために、本小田原町に、魚問屋の出店を出すことを許され、これが後來魚市場に発展する基盤となった。

元禄以降、小田原町は魚市場として繁栄をきわめ土地は乾く間もなく、いつも長雨が降った後のようにぬかるんでいたので、若手衆中はぬかるみを嫌って足駄を常用していた。表は上物の鳥桐を用い、裡の木の下駄をさし、皮鼻緒をすげたいかつい下駄で、俗に「小田原下駄」といわれたものだった。第一頁に載せた「江戸雀」(延宝年間一六七三〜八〇刊)の挿絵に、足駄ばきの人物の描かれているのに眼を止められたい。

小田喜鯛

雑毎に鯛献上やをたきもり

秘香 (鹿子)

この句、木村仙秀翁の『註解江戸名物鹿子』に、「小田原町に小多喜権兵衛という商人があって、小田喜組という男達の頭分であり、享保の頃に相当に名を売った男があった。吉原で、当時の俠客、鐘(つりがね)弥左衛門と喧嘩をしたことが有名な話である。この項、或はその家のことをいったもの」と解いてある。

筆者按ずる、「小田喜鯛」は『続江戸砂子』(享保二十年刊)第一巻末の「近国の土産大概」中に載る「〇大多喜鯛、風味不_レ真、惣して魚類来ル、上総」とある大多喜鯛と同じものではあるまいか。しからば、「おたき鯛」は上総大多喜産の鯛の総称で風味やや落ちるものらしい。雑祭りに使う鯛は上物より一等も二等も格の低い「おたき鯛」を使ったという、そういう意味合いの籠った句なのかも知れぬ。

小田原町を通りて

雁鴨の命待間を鳴にけり

一茶 (二茶旅日記 文化三・二一七)

「小田原町を通りて」という前書がしてあるけれども、これは一茶の思い違いで、安針町の鳥問屋、東国屋の前を通っての口吟だろうと思われる。東国屋は、宝暦頃から名代の鳥屋で、川柳に

ぎつ／＼の肉を安針町で買ひ

青首の受判をする東国屋

明日知らぬ鷺に餌を飼ふ東国屋

などよまれている。(『川柳江戸砂子』)

(米河岸)
米河岸でさくや種田のはつ時雨 嵐 竹
(芭蕉庵小文庫)

「こめがし」は、もと、本船町一九番地から二五番地にいたる地先と、伊勢町一から一〇番地にいたる河岸の称呼で、後の本町一丁目一〇番地に当るが堀留川の埋立とともに、その呼び名は失なわれた。昔時、東堀留川の塩河岸と、西堀留川の米河岸にはさまれた河岸地は、倉庫地帯で、全国から問屋へ送られてくる大量の乾物や穀物の荷揚げ場だった。とりわけ、河岸八町の米問屋という言葉があるほど米問屋が多かった。

三田村鳶魚翁の説に、奥州米は寛永九年から江戸に入ってくるようになって、一時は江戸の米は三分までは奥州米といわれたほどだったが、だんだん後になると少くなってしまうという(三田村鳶魚全集巻七)。

(江戸橋)

江戸橋を紀の川波の蜜柑舟 引丸
(七柏集)

江戸橋の富士に雛なしくれの春 蓼 松
(八架園句集)

江戸橋は日本橋の下手に架る橋で、震災前の橋は現在地より五〇間ほど河下にあたる楓川と日本橋川の合流する角の位置にあった。昭和通りの新設に伴って、橋が上手に移る結果となったのである。

今日よりずっと芝居町の葺屋町や堺町に近かったから、関西下りの役者衆は「舟乗込」といって、江

戸橋橋際から舟を上る慣しになっていて、芝居関係者は橋際の仮小屋で、到着する役者衆を賑々しく出迎えたものだった。

それに、日本橋川右岸には木更津河岸があったので、千葉・銚子方面に往来する旅人の数も繁く、ほど近い四日市広小路はいつも盛り場のように賑わっていた。

大伝馬町天王祭祀

祇園会や幟の義なら木綿店 莊丹
(龍静集)

籠払ひそれらが命拾ひもの 正友

角の生へてや来る伝馬町 ト尺
(談林十百韻)

乗初もきたなく見ゆる駄賃馬 晋子
(句兄弟)

大伝馬町太物

涼しきや男世間の真っ昼間 兎羊
(鹿子)

大伝馬町は一・二・三丁目に分れていた。昔の一丁目は、現在の本町二丁目と同三丁目の一部、昔の三丁目は、大伝馬町一丁目と、小伝馬町一丁目の一部となっている。昔の三丁目は二丁目の東続きの町で、昭和七年十二月一日、通油町(西緑河岸の一部を含む)元浜町の北一部(西緑河岸の一部を含む)を合併して今称に改った。

大伝馬町は、江戸初期には、江戸城直前の千代田村にあったが、慶長十年の城地拡張に際して、この

地に移り、幕府の公用伝馬をつかさどることになった。御伝馬役の馬込勘解由は、江戸草分け名主の筆頭だったことから、江戸における大伝馬町の地位の高かったことを知ることができる。

この町は、時の移るにつれて、次第に木綿問屋が軒を並べる大商店街に変貌していった。

油町紅絵

物いはず笑ずとても梅の花 綉葉
(鹿子)

油町||通油町の町名は、今は大伝馬町三丁目内に含まれてしまっていて、その称は失なわれた。慶長年中に起立した町で、元和年中、牛込某がはじめて油店を開いたのが町名の起源となったという。

後、地本問屋が多くここに集り、元禄時代には、鶴屋喜右衛門、山形屋市郎右衛門、享保に、村田屋小兵衛、丸山甚八、下って寛政には、萬屋重三郎、文化文政の頃には、(松原堂)藤岡屋彦太郎、(松茂堂)浜松屋幸助の店などがあつた。「紅絵」は、丹絵の次に生じた版画で、享保の和泉屋権四郎の創案で、紅彩色の絵を売りはじめたに起るといふ。

亀井町笹

海棠やむすめゆかしき籠づくり 白主
(鹿子)

亀井町は、小伝馬町三丁目に合併されて、旧称は亡んだ。享保二十年版『続江戸砂子』に、「○亀井町籠、小伝馬町の北の通り亀井町にてこれを作ル、

笹・味噌澁・ひげこ・岡持・竹産籠・竹興等」と記されているとおり、早くからこの地の竹細工は有名であった。

文政の頃、この町の籠職亀井齋は、人形細工師の和泉屋前五郎と手を組んで、いろいろと見せ物用の大作の花籠細工を製作して人々を驚ろかせた。

狂歌四天王の一人、頭光（つむりのひかる）は、亀井町に住んで町代を勤めていたし、浮世絵師の窪俊満も、この町の住人だった。

塩町ばく物

花と見る目あき千人雪の市

快袖

（鹿子）

塩町は岡付塩町ともいった。塩屋が多かったからの称である。『江戸名物鹿子』の挿絵には、粗末な民家の軒先に竿をかけ、これに、浴衣・巾着・越中ふんどし・財布・火事頭巾などをぶら下げた店先の図が描いてある。

前田勇氏に従えば、句題のばく物は、一に暴物の文字を宛て古物の意であるとし「正体の知れぬ物、怪しげな物、いかがわしい物、いかさまもの」の意であるという（『江戸語大辞典』）。句意は、「かかるあやしげなばく物でも、掘り出しものだと喜んで買っていく人があるとは、まことに目明き千人、盲千人の世の中だ」というほどの意であろう。

横山町花産織

織ゆくや何かさゝきのひよく産来

絮

（鹿子）

浅草橋手前の問屋街横山町も、かつては家内工業の花ござ織が名物だった一時期があったのである。

馬喰町旅籠屋

天台の花の鐘撞あぶら銭

又鱗

（鹿子）

馬喰町敷居の上を草まくら

紀逸

（延享廿歌仙）

馬喰町は一丁目から四丁目までであった。古名を六本木といい、徳川氏入国以前から街通の馬次ぎ場として知られていた。後年、この町が旅籠屋街として栄えたことは記すまでもなからうが『江戸見物道知辺』に、馬喰町の旅籠屋周辺の説明をして「馬喰町一丁目より四丁目迄両がははともに旅籠屋にて、四丁目に藤井しま屋のごぶく店、向ふに山本太物店、右はつば店同朋町、左の方は柳原、土手八町の古着見世也」また「ばくろ丁よりにしかたへまよりますれば、小伝馬町三丁めに、さつてや茂兵へが、しらみ紐、二丁目三丁目向かはともに、たんす長持、ひつ、つらら……」と書いていて、文化の頃のこの周辺の町のようにすが、ほうふつとして眼前に浮んでくるのを覚える。

橋本町願人

あさがほやなせば八百借り衣

露調

「願人坊主は、もと馬喰町に住んでいたが、後に橋本町に移った。その起源は区々として詳かでないが、東叡山の配下に属し、特に住吉踊をなして米銭を乞ふにいたった。また、寒中も赤裸に太き縄の鉢

巻をしめ、腰にも藁の注連を廻し、扇幣、錫杖などを両手に持ち、早口に咒文を唱へ、踊り歩行、至って元氣よき体のものであった。また一名をスタスタ坊主といい、「すたすた坊主の来る時は、世の中よいとや申す。すた／＼／＼」など言い囃す。

また一文人形を並べて、稲荷大明神などといって銭を乞うものもあった。（木村仙秀氏「註解江戸名物鹿子」）。馬喰町の北側裏町の橋本町は、こうした願人坊主の多い細民街だった。天保七・八年にかけて米価高騰し、飢餓になやむ窮民が続出したため、御救小屋に収容して救済したことがある。折ふし厳寒の時節で、橋本町では食物不足で傷寒などを煩う者が三・九・六人もいたというので、貧窮者の多い町だったことが察せられる。（「青山出火類焼窮民御救一件」（市史稿・救済篇四、三〇五頁）

（浅草橋）

いくたりか浅草橋にこもかぶり
おたすけたまはれなむくわんぜ音

素玄（天坂独吟集）

本町通りを、大伝馬町、通油町、横山町とたどって、浅草橋広小路へ出ると、広場を中にして、郡代屋敷の表門と向きあって、浅草見附御門があった。この門の建設されたのは、寛永一三年（一六三六）である。明暦三年の江戸大火の折、小伝馬町牢屋敷の囚人が解き放されたと聞いた役人が、あわてて城門を閉ざしたために、思わぬ大惨事を招いたことを我らは忘れることができない。